世界威人傳
Vol.1　ウォルト・ディズニー

2018 年、ミッキーマウス生誕 90 年だそうだ。目出度いことである。彼はかなりの苦労人で、第二次大戦中には兵隊にも行き黄色いサルをバリバリ撃ち殺したこともあったという（ただしこの事実はひた隠しにされている）。戦後になると純情さを取り戻して世界の子どもたちに夢を与え続け、この世にはなんの問題も無いことを伝え広める米国特使として活躍している。そろそろノーベル平和賞でもあげたい。

ミッキーがこういった「夢と魔法」を布教するのは、もちろん生みの親であるウォルト・ディズニーおじさんに洗脳されているからである。だから、ミッキーが想定している「世界の子ども」とはディズニーおじさんが何気なく信じていた「世界の子ども」とまったく同じだ。

わんわん物語は優れた映画で、ディズニーおじさんが「ごく普通」と勝手に認識している小さな町が舞台だ。そこに住むのは白人の金持ちだけ。一部に登場するイタリア人も、イタリアレストランを経営する絵に描いたように陽気な人たち。その他の人種、たとえば黄色人種はこの町にはいない。もちろん肌の色が黒い人など、この町にもアメリカにも存在しないようだ。

この映画を見てシンパシーを覚える子どもとは、中産階級以上の白人の子どもだけだろう。もっともディズニーおじさんの頭の中には、子どもといえば白い肌、というイメージしかなかったのだろうから、その製作意図は貫徹され、映画としての完成度は高い。

さらにピーターパンという世にも類まれな素晴らしい映画では、なんとひとつの人種が「馬鹿」と決め付けられている。アメリカ先住民は馬鹿だから……と登場する子供たちが声を合わせて歌う。もしこの映画を先住民の子どもが観たら、どんな気がするだろう。ディズニーおじさんは何も考えていなかったらしく、一切言い訳をしていない。熱烈な共和党員のおじさんとしては、言い訳して仲間内で立場がなくなるのが怖かったのかもしれない（注：さすがに問題になって、現在公開されているピーターパンでは歌詞が差し替えられている）。

ディズニーおじさんが死んでしばらくたってから、やっとディズニー社は有色人種を主人公にした映画を作った。ポカホンタスだ。あろうことかアメリカ先住民の女性の話である。未来永劫白雪姫だけ作っているような会社がこの変わり身。しかし「世界の子ども」の何たるかを理解したとは到底思えない。たとえばアメリカの先住民居留地に住む子どもたちは、いまだにディズニーおじさんの夢と魔法の王国に簡単に入れそうにない。

ディズニーおじさんの妄想を具現化したというディズニーランドなるぼったくり施設がある。入場料は一人 1 万円程度。世界各地にあって、どこも入場料は似たようなもの。家族で行けば数万円はかかる。園内では持ち込み飲食禁止で、すべてディズニーから買って飲み食いせねばならぬ。お母さんのおにぎりを食べると違反になる。食中毒防止のためらしいが、過去には日本のディズニーランドで賞味期限切れの食材を供したとか。

夢と魔法は高くつく。親にとっては悪夢と詐欺だ。ミッキーマウスはいつも朗らか。そりゃそうだろう、儲かって笑いが止まらないから。

今、本当に夢と魔法が必要な子どもたちに、ディズニーは何を与えているのか。ミッキーがアフリカでチャリティーショーを開いたとは、寡聞にして聞いたことがない。